

吉弘神社と四百年祭

神社総代表（実相寺町） 下和田 巖

別府市石垣西（旧中石垣村）に鎮座する吉弘神社（山村太一宮司）では、去る平成十三年（二〇〇一）四月に祭神、吉弘嘉兵衛統幸公むねゆきの没後四百年祭を拜殿の竣工を兼ねて挙行し、多くの参拝客が訪れた。

記念祭では恒例の神事のあと、特設ステージでお神楽や剣舞の奉納、筑前琵琶びわの演奏などが披露され、またカラオケ大会や餅まき、吉弘第一子ども会の出店などがあつて賑わつた。

山村当宮司は「これも皆さんのおかげで立派な拜殿ができて、本当に有難い。この四百年祭を機会に気持ちも新たに、君国尽忠に散つた統幸公を偲び、この神社を地区の氏神様として守つてゆきたい」と抱負を語つた。

従来の拜殿は大正十五年（一九二六）に建てられている。その足跡をたどると、合戦後、肥後細川藩（忠興ただあき）により吉弘石神社が造立され、のちに村人たちはこの墓地周辺を神域として整備し、藩政時代の嘉永五年に南・中・北の三石垣村の名主らによつて神社拜殿が建立された、という。老朽化が進んだために今回、約一億円を投じて改築がなされた。

新しい拜殿は、木造神明造りで約百二十平方メートル。参道の石畳を敷き直し、西入口に鳥居を設けて参拝しやすくするなど境内環境も整備された（以上『大分合同新聞』平成十四年九月九日号）。

吉弘嘉兵衛統幸の概要

（永禄六年〓一五六三〓慶長五年〓一六〇〇）

大友田原家の庶流（初代大友能直よしのなおの異腹の庶家の系統）、吉弘家第十代を継ぎ戦国時代最後の武将。父は九代鎮信しげのぶ、母は大友本家の血を引く臼杵鑑速うすきあきはやの娘である。

統幸は元龜二年（一五七二）頃に大友氏に出仕し屋山城修築を命じられて以来、秀吉の豊前出陣、大坂城普請などに関与して文禄元年（一五九二）には朝鮮の役にも出陣する。大友家最後（二二代）の吉統の改易にともない浪人の身となるや、従弟で当時「西大友」と呼ばれていた立花城主（宗茂、現福岡県粕屋郡新宮町）の許に身を寄せる。東西手切れに際しては西軍に味方し、吉統に不本意ながらも加担する。東軍松井康之が守る木付城夜襲につづく石垣原合戦で勇猛果敢に戦うも討死した。享年三七歳であつた（大分合同新聞社『大分県歴史人物事典』）。

編集部（大野） 本号では「石垣原合戦」の特集記を企画しました。当史談会の元副会長で現在理事をお願いしている大分県地方史研究会所属、三重野勝人先生（前鶴見丘高校長）が実証的な史料に基づき本格的ともいえるべき論稿を寄せて下さいました。

この際、改めて吉弘公の合戦に果たした業績を追慕し、四百年を経て二一世紀に突入した現在、社会の世潮を批判しながら「公から何を学ぶべきか」について、忌憚きたんのないご意見をお聞かせ下さいませんか。

今こそ日本人の誇りと自覚を

下和田（同神社総代表、昨年の新聞を見ながら）

昨年の新聞で「今こそ日本人の誇りと自覚を」と題する私の小文を掲載して頂きました。その一部――

「今や世界はテロの脅威にさらされている。その中で我が国の若者たちだけでなく、日本人全体が糸の切れた

タコのように吹く風のままに揺れ動いている。吉弘神社の

四百年祭に当って、もう一度私

たちと国の関係、日本人の誇り

（文化の特質や国民的資質）、日

本人の生き方は……、日本の

将来への展望……、家族生活はいかにあるべきか……などを見つめる機会にしたいと思っています。」

「時の変化を悟り、東軍参加を策していたのに主君大友氏が石田三成の西軍に加担して譲らなかつたため一身の安危、一門の利害をも顧みず、生命に殉じて我が身を処したその献身的行為と潔さを私は訴えたいのです。」

と憂国の真情を率直に、私なりに吐露とろしたつもりであります。

大野（以下、――） 現代社会の思潮は下和田さんの言われるように、全く狂っているというか、病理にさいなまれた末世の症状といってもよいのではないか。毎日の新聞やテレビを見て、そう感じている人は多いのではありませんか。嘆かわしいことですな。

下和田 最近の日本人の関心事としては国際関係（外交）では、今の瀋陽（旧満州奉天）領事館への難民乱入問題、東支那海での不審船事件、日本海の呼称をめぐる日韓あの軋れ、首相の靖国参拝から教科書問題、日本の安全保障と北朝鮮の日本人拉致らち、それに日本政府の交渉態度などなど、枚挙にいとまがなく、苦々しい想いの連続です。何とかならないですかね。

外交問題だけでなく、社会の治安でも、まさかと思われた不法滞在の外国人の庄内や山香での一家殺傷事件、日出では暴力団絡みの死体をコンクリート詰めにして海に遺棄



下和田さん

したり、タムロ（屯）族の若者集団による「オヤジ狩り」、
独居老人の金を狙った「オレオレ詐欺事件」、若い母親の
幼児虐待や嬰兒殺、結婚の邪魔だと家族を殺傷した十九歳
の大学生と交際の女子高校生殺人（未遂）の事件、果て
は「誰でもよい、人を殺してみたかった」という連続殺人
魔事件など、など……。話にもなりませんね。

—— まさに言いようありません。

今や、日本は、二、三十年前まで先進国の中で一番治安
の良い国、女性が市内で深夜でも一人歩きできるほどと羨
ましがられていた。それが今や、世界に冠たる（？）「犯
罪王国」に……。

現在日本では、犯罪の八割が野放しになっています。平
成十三年度の刑法犯検挙率は十九・八%、とか。先進国の
中でもアメリカに次いでワースト第二位。最も治安の良い
のがドイツで五三・二%だそうです。

犯罪の急増（「ナンデダロー」）

警察庁の平成十四年度『犯罪白書』によると、平成になっ
ての犯罪件数はウナギ上り。平成元年度に一六七万三二六八
件だったのが、同十三年度には戦後最悪の二七三万五六一二
件と、なんと百万件以上の激増というのです。

さらに悪いことに、たいへんな勢いで凶悪犯（殺人・強

盗・放火・強姦・幼児誘拐）が増えている。同十三年度に
は、一万一九六七件、同元年度に比べて実に二倍に膨れ上
がっている。検挙率も悪化し、同十年度までは九〇%前後に
推移してきたが、十三年度には六一・二%に下落し、これも
戦後最低といわれています。（平成一五年〥二〇〇三『文藝
春秋』六月号 「特集安全大国・日本の不安」警察に一体何
が起きている」佐々淳行〥初代内閣安全保障室長、以下主に
これに依る）。

下和田 日本の最新の治安状況は、そのような具体的数字に
実証されるわけですか。

かつて、ひと昔まで、国民は枕を高くして寝られる国で
した。だが、あの例のオウムの事件以来、犯罪が急速に増
加したような気がします。

—— 前掲論稿の発表者（佐々氏）は、こんな体験談も記述
しています。

「ある思い出から話を進めたい。三十年も前になるが、
当時の後藤田正晴警察庁長官にアメリカから一人の要
人、ニューヨークのリンゼイ市長が訪ねてきた。当時、
同市の犯罪状況は最悪で手をつけられず、市警もまた腐
敗の巢窟そうくつだった。

対する日本は、凶悪犯の検挙率が九割近く、殺人事件
に関しては九六%という、リンゼイ市長からすれば信じ

られないような治安を誇っていた。市長から東京都の殺人件数を問われ、外事課長を務めていた私（佐々氏）は『三百件ほどです』と答えると、そんなに少ないのかと聞いた顔をみる。『一ヶ月でか』というので『いや一年間です』と答えると、目を丸くしていたのが忘れられない、と。

その後、リンゼイ市長から「驚異的な治安確保の鍵は何か」と尋ねられた。後藤田長官はとつさに「それは交番（警察派出所）制度の普及にある」と言っておられました。

残して欲しい「交番制度」

下和田 そもそも交番制度なるものはメイド・イン・ジャパンで、世界でも類例を見ないものであつたらしい。のちに、あの誇り高いスコットランド・ヤードがロンドン市内にこの制度を採用し、ここ数年は東南アジア諸国からも注目されて東京に視察に来ていゝ、と聞きました。

ところが日本政府では、現在予算の都合から全国の交番の統廃合を進めており、代わりに「警察官一万人増員」を推進する計画とか。さて、どうなりますか……。

——先の佐々氏の報告書では、警察官一人につき何人の国民を護るのかの指数——「負担人口」では、日本の警察は五四一人。これに対してアメリカ一三八五人、ドイツ一

三二五人、フランス一八九三人であり、イタリーにいたつては二七六人とのことです。

これでは日本の警察官はあまりにも負担が重く、全く気の毒と言ふほかありませんね。若い者たちから三K職種（危険・きたない・きつい）の一つと就職でも敬遠され、加えて極めて少数の警官の不祥事の発覚には、学校の教師のそれと同じくマスコミから厳しく叩かれるし……。

先にも触れた入国不良外国人の犯罪でも、社会制度や法体制、経済的要件とも絡んで問題がひそんでいるのではなにか。日本での刑事犯は国際比較の上でも刑罰が軽く、事件捜査や取調べでは戦前の反省から拷問を加えたり暴力を振つたりしない（註 日本国憲法第三六条「公務員による拷問および残虐な刑罰は、絶対にこれを禁ずる」）、刑務所での処遇もさほど悪くないというのが関係者のいちおうの評価らしい。

なお、問題なのは日本人の家屋は戸締まりが安易で強盗にも入れられ易い、といわれる。国際化が進み犯罪の広域化や年齢の若年化、凶悪化が進行しているようだ。国民一人ひとりが我が家の安全と家族の生命を護る「安全保障」に取り組まねば、と考えますね。

下和田 家だけでなく、個々人も「心の戸締まり」が大切ですね。

そう言えば、今朝の大分合同新聞（二〇〇三年十一月二十三日号）に「オレオレ詐欺事件」の報道が出ていました。

「孫や息子を装って『オレだよ、オレ』と電話をかけ、交通事故の示談金名目などで現金をだまし取る詐欺事件が全国で相次ぎ、今年一月～十月現在での被害総額は約二二億六千万円に上ったことが警察庁のまとめで分かった。発生件数は全国で三八〇二件、うち既遂二七六八件。一件当たりの被害額は八二万円―」

「大分県の発生件数二一件、被害額は二四五〇万円。大半が複数犯行で電話、現金引き出し、監視などの役割を分担しているという。『テレビで知り、簡単そうなのでまねた』と供述した容疑者もいた」

高齢者を狙うとは、なんたる不屈者、許せません。古来、「天（神）に向かつて唾を吐けば、わが顔に降りかかる」とか、中国の古諺にも「天網恢恢疎にして漏らさず」とありますね。天空に張りめぐらされた網の目はあらいが、悪事を働けば天上の神は見逃さないの意味です。

それにしても「金」の欲望をめぐる犯罪があまりにも多い。一国の総理たる者（故田中角栄氏）が「悪の模範」を示して金権腐敗の政治を展開した……。保守党の政権からは、なかなかクサレ縁が切れないようですね。

資本主義体制（国家）は良くも悪しくも「欲望の体系

である」と喝破したのは、今から百年も前のドイツ哲学者ヘーゲル（一七七〇～一八三一）です。

先の大戦で廃墟と化してしまった、かつての「神国日本」は資本主義経済のおかげで「経済大国日本」に転進することが出来ました。犯罪までもがアメリカ社会のコピー版になってはかありませんね。下部構造Ⅱ経済が社会の基盤にあつて、上部構造のもろもろの文化現象に影響を与えると説くのがマルクス理論ですが、そんな難しい話はもう止めましょう。

※ ※ ※ ※ ※

—— 少し趣向を変えて日常性の「教育」や「社会一般」に深く関わる問題に触れてみませんか。

下和田 私には冒頭の拙稿掲載小文の中で、次のように論述しました。

「かつて世界から注目されていた日本人の誇りや醇風美俗が戦後は希薄になってしまった。これらはかかつて戦後の教育の有り様、親子の断絶、忘れ去られた人の恩義や大義、家族生活（とくに親子や夫婦）の問題、報恩感謝の気持ちの欠如、社会への奉仕精神の欠落などである。」

「特に強調しておきたいのは、宗教心、なかでも『神仏への畏敬の念』が若い人ほどないことです。科学が

進めば進むほど宗教問題に疎遠になって問題関心が向かず、神仏の存在を忘れてきていることである」と。

—— その点、私も全く同感です。

だが下和田さん、日本人の心に神仏信仰への無関心を指摘されましたが、「政治」的関心度も同様の傾向ではないですか。敗戦後しばらくは選挙の投票率は七、八〇%（全国）でしたが、最近、自治体では五〇%をきっている処も少なくないでしょう。

政治の話は別の機会にして、最近全国に注目された長崎での中一（十二歳）が四歳の幼児を駐車場屋上から投げ落として死亡させた事件、今一つは双方の親に結婚を反対された大学生（十九歳）と交際の十六歳の少女（女子高校生）の親（家族）殺人事件（大阪府河内長野市）をどう思いますか。

下和田 学校の教師でもなく、ましてや心理学者でもない私に尋ねられても……。

強いて言えば、第一の事件はなにか特殊な事例と考えられるが、問題は第二のそれ。男女とも精神がおかしく、思考があまりにも幼稚で単純、どんな家庭環境で今までどんな教育を学んだのか、人間いかに生くべきかを真剣に考えたことがあるのだろうか。

—— 大人の多くもそう感じるでしょうね。何故に親と家

族を殺さねばならなかったのか（殺人の正当性と動機の問題）。何故に「駆け落ち」しなかったのか。戦前・戦後を問わず、それが社会的常識だったんでしょう。そのような事例は、どこの地域でも山ほどあるのでは……。

二人の世界、深みにはまって

逮捕された大学生は、当初「親が邪魔だった。心中するつもりだった」と供述した。一方の女子高校生も「遺体が残っている家でもよいから、一緒に住みたかった」と話したという。さらに二人は「自殺する前に人を殺してみたかった」とも供述していたことが分かった（各新聞報道）。

大阪府警では、当該殺人事件について次のように分析している（「朝日新聞」平成十五年十一月十九日号）。

「人体や死などへの関心が二人とも異常に強く、会話や交際を通じて互いに刺激・触発され、さらにこうした傾向が深まったようだ。自殺願望も、その表われ。殺傷の動機は供述通り『親が邪魔』という単純な思いつきだろう。だからこそ、殺傷の対象が家族に向かっていったと思われる」

「殺してみたという気持ちは、あくまで動機の一部だ。通常は駆け落ちするのだが、それをしなかった理由は『住み慣れた自宅に執着したのではないか』としか考えられない」

取調べ中、二人の男女は「わたしたち刑務所に行くんです

か」といったという。

戦前は、家族道徳の上から尊属殺人の罪は重く（仏教でも「五逆」の罪）、明治刑法では「死刑マタハ無期懲役」と法定され、一般殺人のそれでは「……若シクハ三年以上ノ懲役ニ処ス」（刑法一九九条）でした。だが戦後、昭和何年でしたか、尊属殺人の重刑は日本国憲法第一四条「法の下の平等」に反するとして最高裁は違憲判決を出しています。この判決文の中ではなかったでしょうか。有名な箴言（戒めの言葉）「人間の生命は地球よりも重い」と。

下和田 家庭では親子関係が重要な役割を持ちますね。

確かに人間は、難路・迷路に踏みこみ出口が分からなくなつた時、死をも覚悟するような事態にあうと、その人の真価が問われると……。

もつとも当吉弘神社の祭神、統幸公の戦国時代には「武士道とは死ぬことと見つけたり」（葉隠聞書―元佐賀藩士・山本常朝の口述書）があり、そこに〈死の美学〉があつた。大戦でも、軍人精神の神髄として「戦死」が讃美された（軍人勅諭・戦陣訓）。昨日のように思い出されませぬ。

―― 私事（大野）で恐縮ですが、先の戦争で大正十三年生れは一年の差で学徒動員を免れ、現役召集が昭和十九年秋からアイウエオ順に始まりました。

内地決戦で国内の兵舎はどこも満員、現地教育とかで

入営後一週間目に玄界灘・対馬海峡を渡り、一路満州は関東軍へ。南満で初年兵教育を受け、原隊は北満国境部隊へ（半数近くが戦死傷）。一部が幹部候補生として残留し、私も残つてシベリヤ行も運よく免れて生命を拾いました。戦争の生死は紙一重、なにか運命的なものを感じますね。神の存在というかー。

下和田 そこで考えるのですが、社会生活では、原始の昔から「宗教（信仰）」という精神的糧かてが必要であつたのではないか。生命と健康の保持に食料が必須条件であるように……。

―― 下和田さん、あなたの意見に全く賛成します。

先の戦争体験にかえりますが、無条件降伏の時に私は一大決心をした（多少大げさですが）。といいますのは、もうこれ以上、二度と神仏を頼るようなことはしまい、頼りになるのは「おのれ自身」だ、と。

その時、ふと思ひ出したのが郷土の先哲、福沢諭吉翁の「独立自尊」の精神だった。

ところで科学が進み、技術万能の世の中で「宗教と科学」とは両立できるのか。科学（的認識）の方が万事優先して宗教の存在が希薄化するのではなからうか、という問題があります。

下和田 必ずしも、そうとは私は思いません。

確かに日本は、科学の競争、物量作戦では敗北しまし

た。しかし、それらが全てであつてよいか。物が豊かで経済大国になつて、ご覧のと通りの犯罪社会になつて墮落したではありませんか。物質生活だけで人類が幸福になるとは言えないでしょう。

もう一ヶ月近くで正月ですが、全国で大変な数の人が神社に参拝する風景をどう評価しますか。「宗教はアヘン（阿片）」（マルクス）といった社会主義国家、ソ連邦がどうなつたか。赤色革命（ロシアのロマノフ王朝の専制政治で崩壊、一九一七年）以前の「ロシア」にタイム・スリップ、そして宗教もまた復活したではありませんか。

大野 宗教の存在を否定した国家の宿命、あるいは歴史の必然とみるかどうか。歴史学者でも宗教学者でもない私には、なんとも言えません。

ところで先の正月の神社参拝の件、実は私も鶴見の鎮守神「火男火売神社」（鶴見権現）の責任総代（の一人）をしております。ここ数年、初詣では大変な人出です。拝殿までの表参道は埋め尽され、長蛇の列ができます。不況の年ほど参拝客が多くなるというが、これは正しく真実ですね。今年（平成十五年〓二〇〇三）の全国神社の初詣で客は、松の内三日間で九千万人の大台を超えたと記憶しています（警察庁推定発表）。

むろん、これらの参拝者全員が日本古来の伝統神道に因

る「宗教心」の発現、と考えるべきではないでしょう。正月だから、と漫然と参拝する人が多いのも事実です。

全国民のうち、七割五分に当る人が初詣でをする社会現象をどう解すればよいのか。古来、日本社会そして日本人（民族）の心の深層のどこかに「神」が潜在している、と認めざるを得ないのではあるまいか。日本人の生活の一部（生活の構成要素）となつてしていると捉えるべきではないでしょうか。

下和田さん、本日は貴重な時間を取つて下さり、有益なお話ができましたことを喜んでおります。

一カ月余りでお正月には私も吉弘神社にお参りします。では、よいお正月をー

（H15・11・29記）

「大分合同新聞」写真提供



改築された吉弘神社